

相談支援つうしん

<第93号>2023年10月30日
県立湘南支援学校 支援連携グループ
相談支援班 ~教師編~

2学期が始まったと思ったら、もう10月も終わりですね。やっと秋らしくなってきた、大人も子どもも少しホッとできていますかね。本校の相談支援の書棚にある「自閉症児と絵カードでコミュニケーション PECS と AAC」という本を手にとったことはありますか？日本では2006年に発行され、2020年には第2版が発行され、本校でも遅ればせながら購入しました。是非お時間のあるときに読んでみてください。今回はその内容からなるほど💡!と思ったことを少しご紹介します。

PECS※1は誰にふさわしいか？ (書籍本より抜粋)

- ①その人は、機能的なコミュニケーションを現在使っているか？
NO ⇒ PECS が適しています。
YES ⇒ PECS が適していることもあります。
- ②その人のコミュニケーション様式は、見ず知らずの人にも理解できますか？
NO ⇒ PECS が適しています。
YES ⇒ PECS が適していることもあります。
- ③その人は、機能的なコミュニケーションを自発していますか？
NO ⇒ PECS が適しています。
YES ⇒ PECS が適していることもあります。
- ④PECSによって語彙の拡大やメッセージの平均長／複雑さの拡大に役立つ可能性がありますか？
YES ⇒ PECS が適しています。

これを見るとほとんどの児童生徒に対して PECS が有効だということになります。ただ、この前の章では、身振りの重要性や他の代替コミュニケーションの長所や短所の記載もあるため、本人に合ったものを色々試しながら探しつつ、見極めていくことが重要といえます。また、私たちも発語だけでなく、表情や身振りなど様々な方法でコミュニケーションをしています。同様に子どもたちも1種類の AAC※2だけでコミュニケーションニーズを満たすことはできないので、複数の方法を組み合わせる必要があることも述べられています。

AAC を自閉症の子どもに使うときに保護者や教員が心配することの一つとして、言葉への影響がありますが、AAC の使用によって言葉の発達を妨げることはないという科学的な根拠があり、それどころか、言葉の発達が促される子どももいるそうです。

言葉を話すようになったら PECS はやめるべきか？

子どもの最初の発語を聞くと、親も専門家も PECS ブックを片付け、言葉だけでコミュニケーションすることを強く求めがちです。でもそれには細心の注意が必要です。PECS を使いながら言葉も使う子どもたちにおいて、コミュニケーションブックを使える場面と使えない場面で比較すると、ブックなしではごく限られた言葉しか話さなかったのに対し、ブックありでははるかに複雑で多様な言葉を話していました。ある子どもはブックなしでは単語のみの発語なのに対し、ブックありでは文カードを完成させて「緑のおもちゃを2つください」と言えました。あるシステムから別のシステムへ移行するときには、いかなるスキルも失われてはなりません。視覚的な補助コミュニケーションをやめるためには、子どもの話す言葉は少なくとも **70%**は初対面の人にも確実に理解できるものになってほしいと思います。といったことが書かれています。ぜひ参考にしてみてください。

※1:コミュニケーション・システム (PECS:The Picture Exchange Communication System)

ボンディとフロストによって開発されたコミュニケーション指導プログラムで、フェイズ1からフェイズ6までで構成されている。
フェイズ1:絵カードと好きなものを交換することを子どもの前に立つ人と子どもの後ろで身体的にガイドをする2名で教える。
フェイズ2:子どもの前に立つ人とカードが貼られているボード(PECSブック)との距離を離す。
フェイズ3:絵カードの弁別。フェイズ4:文シートに欲しいもののカードと「欲しい(ください)」というカードを貼って文にする。
フェイズ5:「何が欲しいの?」という問いに答える。
フェイズ6:要求ではなく「何を見ているの?」等の質問に答える。

※2:拡大・代替コミュニケーション (AAC:Augmentative Alternative Communication)

↑PECSもAACの一つです。

引用・参考文献

「自閉症児と絵カードでコミュニケーション PECSとAAC」第2版 アンディ・ホンディ/オリ・フロスト著

「特別支援教育におけるコミュニケーション支援」AACから情報教育まで

「特別教育におけるコミュニケーション支援」編集委員会

お立ち寄りください



世界には手で食事を食べる(手食)民族が4割もいるそうです。でも日本は「箸食」なので保護者の方からも「箸を使えるようになってほしい」ということもよく耳にします。

幼稚園保育園に巡回にいくと、お箸を使い始める園児をよく見かけます。でも上肢機能の発達段階としてはお箸の練習を始めるには、まだ早い園児も多い印象です。〇歳になったから、もう小学生だからという理由でお箸の練習をするのではなく、一人ひとりの発達段階にあわせてお箸の練習も始められるとよいです。それはいつ頃かということ、スプーンやフォークなどの食具、鉛筆やペンなどの筆記用具が3指握りでスムーズに操作できるようになったときです。この頃になると、お箸の使い方を教える大人も練習をする子どももあまりストレスなく練習することができると思います。

元和室(現在工事途中)に簡単な「上肢機能の発達」と「お箸の練習」の段階付けについての掲示をしました。お箸を練習するときの参考にしてもらえるとありがたいです。ただ、お箸は大人でも上手く使えない人がいるほど難しい道具です。それぞれの児童生徒の発達段階にあった食具を使って食べられることを目標にできるとよいですね。(ちなみに一時的に他の支援グッズも元和室にある(11/10頃からは廊下のロッカーに移ります)のでご活用ください。)

相談カード(教員用) 記入日 令和 年 月 日

対象児童生徒 小・中・高 年 氏名(イニシャル)

1. どのようなご相談ですか?(〇をつけてください)

- ①行動面について ②学習面について ③コミュニケーションについて ④運動面について
⑤家庭に関すること ⑥その他()

2. 困っていることは何ですか?

3. 今後どのような方法をご希望ですか? ①情報提供 ②アドバイス ③ケース会 ④外部専門職との連携

- ⑤道具の工夫環境調整 ⑥その他() 担任→相談支援係へ提出をお願いします。

